

怒りにひそむ

まごとのごころ

—『もののけ姫』に見る怒りの心理臨床学

国見台病院
松本聡子

はじめに

サンは、怒りに震え、我を忘れて
います。自分を育てたもののけ達や
森を傷つけ、自然を荒らして奪って
いこうとする人間への怒りです。そ
してその怒りを動力にして、タタラ
場を治めるエボシを殺めようとしま
す。さらには、助けてくれたアシタ
カをも刺し殺そうとしてしまいます。
それが、サンとアシタカの出会いで
す。
時に怒りは、現実を見失わせませ

そのような怒りというのは、厄介で
危険な負の感情に見えます。それで
も、どうして我々には怒りという感
情が生まれてくるのでしょうか。ど
のような感情であっても、生まれ
てくるには理由がありそうです。

怒りとはどのような感情なのか

みなさんは、どのような時に怒り
を感じるでしょうか。攻撃されたと
感じる時？ 誰かが自分を大切にし
てくれないと感じる時？ 自分
の信念と他者の信念が違う時？ 思

うようにならない時？ それとも、
よくわからないイライラとして体感
されることもあるでしょうか。一言
で怒り、言い換えると攻撃性と言っ
ても、それはひとつの理由から生ま
れるひとつの感情ではありません。
そもそも人間には、動物的な本能
としての攻撃性が存在しています。
それは、進化をさかのぼっていくと、
弱肉強食の世界を生き延び種を残し
ていくために、捕食し、身を守るた
めに必要なものでした。ただし、現
代の私たちには、そのような直接的
な攻撃性を生きるために使うことは
ほとんどありません。むしろ、腹が
立ったから殴るというような、衝動
を即座に発散させる行動に移すばか
りでは、社会が混乱してしまうので、
人間は理性というもので衝動を抑え
るように発達してきました。

しかし弱肉強食ではなくても、攻
撃性が自己防衛のために必要な場合
もあります。他者から一方的に理不
尽なことをされたり、明らかに悪意
を向けられたりした時にさえ我慢が
必要とは言えません。「そういうこ
とはやめてください」と反発するこ

とや、憎むべき相手をきちんと憎む
ことも、ひとつの怒りの表現であり
大切なものです。

また、自己主張し、競争していく
ことも攻撃性の発露のひとつです。
たとえ理性で抑えられていても本能
的な衝動エネルギーは湧いてきます。
そのエネルギーを発散する方法とし
て、スポーツや勉強、芸術といった
より社会的で文化的に認められる形
に変えて表現していくことがあります。
私たちには、自分らしさを作り
上げていくことや、自分を好きにな
っていくことを求める思いがあり、



© 1997 Studio Ghibli · ND

そのために他者と自分を比べて競争心が湧いたり、自信をつけたがったりするものです。

しかし、多くのひとは、誰かに怒りを感じたり憎しみを抱いたりすることや、競争に勝って注目を浴びたいと熱望することを、悪いことや卑しく恥ずべきことのように考えがちです。それは、私たちのところのなかにある倫理観や価値観が、それらの感情に対して強い罪悪感を生じさせることに由来します。ここには、個人的な成長過程を越えて、日本人のこのころの文化として歴史的に育まれた感覚も含まれます。

このころの健康にとつて重要なことは、「わたしは、こういう理由で怒っている」と自覚し、持ちこたえられるかどうかです。怒りや競争心が生じること自体は決して悪いことではありません。確かに特に負の感情を実感することは不快なもので、苦しく、こころが蝕まれるように感じられることもあります。それでも、怒りがエネルギーとなり、私たちをより良い方向性へと導く原動力にもなりうるのです。

怒りの奥にあるものと、怒りの先へ

アシタカは、サンに怒りに理解を示しつつ、女性や病者という弱い立場の人々を守り、生きるために強くあろうとするエポシの姿も知っています。もちろん、エポシには冷酷で容赦ない面もあるのですが、それでもアシタカはそれぞれの思いを知った上で、暴力で傷つけ奪い合うのではなく、森と人間が共存する術はないかと葛藤します。

サンはサンで、もののけ達が怒りに飲まれて自らを見失い、ついにはイノシシ一族の王である乙事主おことぬしまで



© 1997 Studio Ghibli・ND

タタリ神へと変貌していく様に、このままではすべてが失われていってしまうことに気がつきます。実はそこには、サンが元は生贄として棄てられた人間であり、もののけにもなれない、どこにも本当の居場所がないというこころの空洞も浮かび上がってくるのです。

こうして、それぞれの言動の奥にあるもの、つまりはこころの空間がたち現れてきます。こころのなかは、たとえ意識されなくても、記憶や経験、感覚、時間の流れといった複雑で多彩な内容が溢れた立体的な世界です。たったひとつの感情がひよこ

つと生じるのではなく、その感情に関わるたくさんおこころの事柄があり、それらが存在するのがこころの空間です。

サンおこころの怒りの奥には、棄てられた傷つき、愛するものたちが傷つけられる姿に直面した傷つきなど、実は多くの喪失に関連した哀しみが潜んでいました。アシタカという、サンの怒りの器になり、否定も肯定もせずおこころにしかし共に歩んでくれる存在を得たことで、次第にサンも自分の複雑なこころの動きを改めて感じてい

くようになります。

物語の最後にサンは、人間への憎しみ自体が無くなりほしくないものの、すべての人間が信じられないのではなく、アシタカへの信頼と愛着が芽生えました。アシタカにより受け止められていた怒りは、サンのこころで抱えられるようになったのです。そして、それはそれ、これはこれ、というような分別が付けられ、自らの怒りの感情で振り回されることはなくなりました。

終わりに

私たちが日常的に目にする怒りの結果としての言動は、表面的で断片的な出来事おこころの一端でしかありません。それぞれの怒りの背景には、長い物語があり、たくさんおこころの情緒体験が含まれているものです。もしも誰かが怒りを感じているのなら、そこに至るまでの相応の理由や歴史があるのです。それは、自分自身のこころの世界にも言えることです。そのようなこころの世界に思いを巡らせられる想像力を育みたいものです。